

聖霊シリーズ「異言の賜物」

1A 「異言」とは

1B 学習の結果ではない言葉

2B 神との音の契約

2A 聖書に出てくる記述

1B 旧約聖書

2B 新約聖書

3A 異言の用いられ方

1B 祈りと賛美の助け

2B 制限のある使用

4A 止まない異言

1B 主の再臨まで続く賜物

2B 知性という妨げ

3B 信仰を働かせる

4B 愛による完成

本文

聖霊シリーズは、「異言の賜物」に入ります。コリント第一 12 章 10 節です、「ある人には奇蹟を行なう力、ある人には預言、ある人には霊を見分ける力、ある人には異言、ある人には異言を解き明かす力が与えられています。」とあります。

異言の賜物は、ここ 12 章から 14 章にかけて、賜物の列挙の中で最後のほうに持ってこられています。ここでも異言の解き明かす力をもって列挙が終わっているし、28 節も見てください、「そして、神は教会の中で人々を次のように任命されました。すなわち、第一に使徒、次に預言者、次に教師、それから奇蹟を行なう者、それからいやしの賜物を持つ者、助ける者、治める者、異言を語る者などです。」と、最後に異言を語る者となっています。そして 13 章には、異言が筆頭に出ていて、これを語っていても愛がないなら、喧しい銅鑼や、うるさいシンバルと同じであるとあります。そして 14 章では、異言より預言を求めなさい、と言っています。なぜなら、コリントの教会においてこの賜物が持ち上げられて、教会に混乱が起こっていたようだからです。今日の教会でも同じです、適切な用いられ方をしていないために、ある教会では必要以上に持ちあげて、その反動で他の教会では一切、この賜物を否定します。その中で、異言についての理解はとて必要になります。

1A 「異言」とは

1B 学習の結果ではない言葉

そもそも、異言とは何でしょうか？これは、「学習という過程を経ないで語っている言葉」だと

定義できるでしょう。本人が学習して身に付けた言語は、本人が知性を働かせてその言語を用います。けれども異言においては、言語習得していないのにその言語を話しています。御霊がその語る舌を制御するのですが、それを始めるのも、止めるのも、本人が決めることができます。ただ、語る時にその話す言葉そのもの、その舌の動きを神の御霊に任せて自分で制御しない、ということです。それは、地上に存在する言語でもありますし、そうではない言語もあります。パウロはコリント第一 13 章 1 節で、「私が人の異言や、御使いの異言で話しても」と言っています。人の異言だけでなく、御使いの異言もあります。ですから、人の異言であれば、だれかがその言語を理解することができるかもしれませんが、御使いの異言は人間には誰も理解できないかもしれません。

2B 神との音の契約

言語というのは何かということを考えると、「ある一定の音によって、これこれの意味だという合意」が数多く存在するので、それが言語と呼ばれます。私たちの教会に、ベトナム人の姉妹がおられますが、他のベトナム人と話しているのを聞いていると、もの見事に意思疎通ができています。私たちにはただ音にしすぎないものが、その音が両者にこのような意味があるからという合意があるのです。これを言語と呼びます。

このように考えると、異言で語ることは神との間にある合意であります。私が異言で神に語る時は、私の霊が神に理解する言語によって、神への感謝や賛美、祈りを捧げています。私の知性では理解できませんが、確かに私の霊が神に語って、その言葉を神が受け入れておられることを知るのであります。それによって、私の知性と理解を超えたところにある、深い神の愛や平安、その安らぎを得ることができます。

実際の異言を聞くと、「はたして、これが言語なのか？」と疑ってしまうことがあります。何かよく分からない、ただ舌を震えさせているだけではないか？と思われるかもしれません。けれども、私自身はありませんが、何度も、その言語を理解する人々によって確認されています。チャック牧師は、ずっと「クリオス」という言葉が異言で祈り、賛美している時に出てきていたのですが、聖書学校でギリシヤ語を学んで、初めてそれが「主」という言葉であることに気づいたとのこと。また教会で、フランス語、しかも日常語ではなく貴族の使用したフランス語を異言で話していた姉妹がいたとのこと。そして、ある時に「デークーイ」と繰り返して発していた人がいて、チャックは何だろうな？とっていました。すると、チェコスロバキアから移民した姉妹が、「スミス兄弟、その人の話しているのは、私の国の言葉で「ありがとう」なんですよ。」と教えてくれたとのこと。

2A 聖書に出てくる記述

では、聖書に出てくる異言の事例を見ていきましょう。この賜物が賛否両論になるのは、いろいろな原因がありますが、知性がこれを許さないというのはあるでしょう。それが一番大きな動機だと思いますが、聖書の中では他の賜物に比べると、確かに偏りがあります。

1B 旧約聖書

旧約聖書において、異言の賜物が明確に紹介されているところがないのです。敢えて取り上げようとすると、言葉にならずに呻いている、あるいはあまりにも神の恵みが素晴らしくて言葉にならないような時の祈りです。ハンナが、子が生まれないので心が痛み、そして祈っていた時に、「ハンナが心のうちで祈っていたので、くちびるが動くだけで、その声は聞こえなかった。それでエリは彼女が酔っているのではないかと思った。(1サムエル 1:13)」とあります。けれども、彼女は心を主の前に注ぎ出していただけでした。これが異言であったかどうかは不明です。むしろ、心の苦しみが強くて、言葉になっていなかっただけでしょう。同じように、ヒゼキヤ王が預言者イザヤから、すぐに死ぬと宣言された時に彼は祈りました。「38:14 つばめや、つるのように、私は泣き、鳩のように、うめきました。私の目は、上を仰いで衰えました。」ツバメや鶴、鳩のように呻いて祈りました。

そして使徒パウロが、異言について説明した時に、イザヤ書を引用してこう言いました。「1コリント 14:21-22 律法にこう書いてあります。『わたしは、異なった舌により、異国の人のかちびるによってこの民に語るが、彼らはなおわたしの言うことを聞き入れない。』と主は言われる。」それで、異言は信者のためのしるしではなく、不信者のためのしるしです。けれども、預言は不信者でなく、信者のためのしるしです。」これはイザヤ 28 章からの引用ですが、背景はイスラエルの民がイザヤの預言の言葉を聞かなかったので、裁きとしてアッシリヤ人が来てその異なる言葉を聞いて、あなたがたが悟ることができないようにする、という文脈で語っています。同じように、教会において悟ることのできないような言葉が語られているのは、信仰を建て上げるためのものではなく、むしろ不信仰を手助けしているようなものである、ということをパウロは言っています。ですから、この引用箇所は異なる言語と不信仰という話題であっても、そこで異言が語られていた訳ではありません。

2B 新約聖書

そして新約聖書では、どうでしょうか？ イエス様ご自身が聖霊で満たされていましたが、この賜物を用いられませんでした。しかし、約束ははっきりとされました。「マルコ 16:17-18 信じる人々には次のようなしるしが伴います。すなわち、わたしの名によって悪霊を追い出し、新しいことばを語り、蛇をもつかみ、たとい毒を飲んでも決して害を受けず、また、病人に手を置けば病人はいやされます。」新しい言葉を信じる者は語るようになると言われました。

そして使徒の働きで、聖霊のバプテスマを受けた人々の中に、異言の徴が伴っています。その始まりはペンテコステ、五旬節です。「2:1-4 五旬節の日になって、みなが一つ所に集まっていた。すると突然、天から、激しい風が吹いてくるような響きが起こり、彼らのいた家全体に響き渡った。また、炎のような分かれた舌が現われて、ひとりひとりの上にとどまった。すると、みなが聖霊に満たされ、御霊が話させてくださるとおりに、他国のことばで話した。」そして、五旬節は世界中に散っている離散ユダヤ人たちが集まってくるので、それぞれの方言で彼らが神を賛美しているので、驚きあきれた、とあります。

異言で話すことは、異邦人への宣教で、百人隊長コルネリオの家でも起こりました。「使徒 10:44-46 ペテロがなおもこれらのことばを話し続けているとき、みことばに耳を傾けていたすべての人々に、聖霊がお下りになった。割礼を受けている信者で、ペテロといっしょに来た人たちは、異邦人にも聖霊の賜物が注がれたので驚いた。彼らが異言を話し、神を賛美するのを聞いたからである。」さらに、エペソの信者たちにも起こりました。パウロが彼らに、「信じたとき、聖霊を受けましたか。」と尋ねたら、「聖霊の与えられることは、聞きもしませんでした。」と答えました。それで、「どんなバプテスマを受けたのですか。」と尋ねると、「ヨハネのバプテスマです。」との答えがありました。それでパウロが言いました。「19:4-7 そこで、パウロは、「ヨハネは、自分のあとに来られるイエスを信じるように人々に告げて、悔い改めのバプテスマを授けたのです。」と言った。これを聞いたその人々は、主イエスの御名によってバプテスマを受けた。パウロが彼らの上に手を置いたとき、聖霊が彼らに臨まれ、彼らは異言を語ったり、預言をしたりした。」

3A 異言の用いられ方

そしてコリントにある教会では、異言の賜物がこのようにはっきりと、列挙されています。これは、御霊の与える賜物であるし、良く用いられるべきものです。では、この賜物はどのような役に立つのでしょうか？何のために与えられるのでしょうか。

1B 祈りと賛美の助け

コリント第一 14 章 14-15 節を開いてください。「もし私が異言で祈るなら、私の霊は祈るが、私の知性は実を結ばないのです。ではどうすればよいのでしょうか。私は霊において祈り、また知性においても祈りましょう。霊において賛美し、また知性においても賛美しましょう。」霊によって祈り、霊によって賛美する、とあります。異言は御霊の助けによって、自分の霊で祈り、賛美する時に用いられます。そして 17 節で、「あなたの感謝は結構ですが、他の人の徳を高めることはできません。」とあるのですが、つまり個人の祈りと賛美において役に立つということです。

そこで、御霊の助けによる祈りについて、異言の賜物が用いられる余地が大きくある約束があります。ローマ 8 章 26-27 節です。「御霊も同じようにして、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、どのように祈ったらよいかわからないのですが、御霊ご自身が、言いようもない深いうめきによって、私たちのためにとりなしてください。人間の心を探り窮める方は、御霊の思いが何かをよく知っておられます。なぜなら、御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです。」先ほど、ハンナの祈りとヒゼキヤの祈りを見ました。どちらも、どのようにして祈ったらよいか分からないで、言いようもないうめきをもって祈っている姿でした。なぜ、そうになってしまうのかと言いますと、何が神の御心なのかが分からないからです。「弱い私たち」とありますが、私たちは、どうしてこのような苦しみがあるのか、どうしてこのような状況の中に自分が置かれているのか、分からないことがあります。そこで、御霊が助けてくださいます。自分の知性では言い表すことのできないその呻きを、御霊が私たちの霊に働きかけて、それで執り成してください。私たちの知性では言い表すことができないので、異言によって祈ることは大変有益です。

そして、「御霊は、神のみこころに従って、聖徒のためにとりなしをしてくださるからです。」とここにはあります。御心に従った祈りは極めて重要です。なぜなら神は、御心になかった祈りを聞いてくださるからです。「1ヨハネ 5:14 何事でも神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるといこと、これこそ神に対する私たちの確信です。」ですから、御霊は私たちのために、神の御心に沿って執り成しをしてくださいます。ですから、霊で祈るとき、聖霊がその祈りをもって執り成してくださり、神の御心に沿った祈りを捧げていてくださるのです。したがって、異言の賜物による祈りや賛美は、私たちの心を安らかにします。自分の知性では理解できませんが、信仰をもって神の御心に沿った祈りを捧げていることができるという確信が与えられるからです。

私たちの主との体験は、しばしば私たちの理解を超えたところにあります。確かに存在していても、それを自分の悟りを超えたところに存在しています。「ピリピ 4:7 そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあつて守ってくれます。」知性では混乱していても、神がそれを超えた平安で私たちの心と思いを守ってくださいます。「エペソ 3:18-19 すべての聖徒とともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができるようになります。こうして、神ご自身の満ち満ちたさまにまで、あなたがたが満たされますように。」神の愛が、人知をはるかに越えています。私たちが主への愛を賛美する時に、いかがでしょうか、知性を使った言葉ではとても言い表せないということがあつていましょう。異言が与えられれば、これを自由に表現できます。知性を超えて霊で言い表せるからです。そして、「1ペテロ 1:8 あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。」言葉に尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びです。喜びは表現できません、しかし霊によればできます。ですから、次の御言葉を実践できるのです。「詩篇 34:8 主のすばらしさを味わい、これを見つめよ。幸いなことよ。彼に身を避ける者は。」

2B 制限のある使用

このようにして、異言の賜物は自分の徳を高めることができます(1コリント 14:1)。そしてコリントにある教会では、この賜物を多くの人たちが用いていました。その行き過ぎがあつたので、パウロは 12 章から 14 章まで、特に 14 章においてこの賜物を用いるのに制限があることを教えました。パウロは、知性で語る預言がすぐれていることを話しています。「1コリント 14:18-19 私は、あなたがたのだれよりも多くの異言を話すことを神に感謝していますが、教会では、異言で一萬語話すよりは、ほかの人を教えるために、私の知性を用いて五つのことばを話したいのです。」

まず、解き明かしがなければ教会の公の場では語ってはならないということです。「14:28 もし解き明かす者がだれもいなければ、教会ではだまっていなさい。自分だけで、神に向かって話さない。」異言は基本的に、個人で用いるものです。個人で持ちいるときには制限がありません。教会に解き明かす人がいなければ、公のところで用いるには、自分も解き明かしの賜物が与えられることを祈るべきです。そして、解き明かす人が与えられている時であっても、二、三人で交互に語

るべきであると教えています。「14:27 もし異言を話すのならば、ふたりか、多くても三人で順番に話すべきで、ひとりでは解き明かしをしなさい。」そして、「すべてのことを適切に、秩序をもって行ないなさい。(40 節)」と書いています。ですから、異言は自分がいつ語り、いつ終わらせるか自分の意志で制御できるものだし、異言でなくても、他のいろいろなところで、未信者が御言葉を聞いて悔い改めることができるように、また他の信者が徳が高まるように、相手への配慮と尊敬を払いながら行なうことができるものです。

さらに、異言だけでなく全ての御霊の賜物がそうですが、これらの賜物は完全なものが現われる前までの一時的なものです。「13:8-10 愛は決して絶えることはありません。預言の賜物ならばすたれます。異言ならばやみます。知識ならばすたれます。というのは、私たちの知っているところは一部分であり、預言することも一部分だからです。完全なものが現われたら、不完全なものはすたれます。」異言も持ちあげたり、その他の賜物、預言や知識も含めて、これらの御霊の賜物が持ち上げられる時に、私たちはバランスを崩しています。なぜなら、完全なもの、すなわち主イエスご自身が教会のために戻ってこられて、私たちを引き上げる時が来たら、これらの賜物はその役目をすべて果たしたからです。この完全な方への希望、愛、信仰を保たせるために、養うために御霊の賜物が与えられているのですから。ですから、このことが大きな話題となって教会を二分させるようなことがあつては、それは神の意図ではありません。

4A 止まない異言

その反対もあります。つまり、賜物を持ち上げるのではなく、むしろ引下げ、否定するという動きも、現実として存在します。いつも存在している古い噂がありますが、教会で誰かが異言を語っていたら、それは主を罵る言葉であった、それは悪霊の言葉だというものです。しかしパウロは、そのような噂を払拭させました。「神の御霊によって語る者はだれも、「イエスはのろわれよ。」とは言わず、また聖霊によるのでなければ、だれも、「イエスは主です。」と言うことはできません。(12:3)」「イエスを主と告白している人の語る異言が、イエスは呪われよとは絶対に言いません。そして、パウロはこの完全否定についても注意を促しています。14 章の最後でパウロは、「14:39 それゆえ、わたしの兄弟たち。預言することを熱心に求めなさい。異言を話すことも禁じてはいけません。」秩序を持って用いるべきだが、異言を話すことを禁じてはいけないとも注意しています。

1B 主の再臨まで続く賜物

基本的に、異言を語るのに否定的な人々は、感情的になっています。とても敏感に、極端に反応するのですが、それは自分の知性が耐えがたいからです。どうして理解できない発音を口から出さなければいけないのかという思いが出てきて、私たちの肉が反発してしまうのです。ですから、聖書を使ってこの賜物が廃れたということを論証しようとする。そこで、用いられる聖書箇所が先ほど引用した、コリント第一 13 章 8-10 節なのです。

新改訳聖書で、「チェーン式」というものがあります。聖書の引照箇所だけでなく、注釈も下の欄

に入っている分厚い聖書です。そこにコリント第一 13 章 11 節の注釈のこうあるのです。「キリスト教会の発足当時は、まだ未成熟の時代であり、教会の成長と確証のために、目を見張るような、御霊の賜物による働きが必要であった。しかし、新約聖書が完成した今は、そのような賜物の必要性は消えた。」これは驚く発言です。その直前の文章が実は、こうなっているのです。「キリストが再臨していない、現在の不完全な時代には、成長の段階がある。」これは矛盾しています。新約聖書が完成した時に再臨は来ていません。もし既に再臨が来たというならば、それは異端です。再臨はこれからのこと、将来のことです。したがって、新約聖書が完成したから、その必要性は消えたというのは、誤った釈義であります。

そうではなく、文字通り「キリストの再臨が完全な時であり、その時に必要性が消える。」ということです。したがって今も、御霊の賜物が用いられる時代にあり、これは主の再臨の時まで続くのです。これを証明するのは、使徒の働き 2 章でもできます。新約聖書の正典が完成したら、必要性はないと言っている人たちの誤った前提は、その時に用いられた預言や異言が聖書ができる前に神の啓示を補完するものであったという考えです。ですから、今、聖書が完成されているのに、さらに付け加えて預言や異言による、神の啓示が与えられるとするのは危険であるとするのです。

これは当時の賜物がどのように用いられたかを知らないからです。預言は必ずしも、聖書のような普遍的真理を語っているのではありませんでした。私たちは神の御言葉によって語り、互いを励まし慰めるのですが、御言葉に裏打ちされた信仰から発する言葉があります。例えば、私は自分の事を全く知らないであろうはずの、カルバリーチャペル・コスタメサの姉妹がメールを送ってくれて、それでその書いた言葉が非常に時宜にかなっていて、私に大いなる慰めを与えました。こうしたのが今日の預言の言葉であり、ルカや他の使徒たちが書き記した福音書や手紙、黙示録とは質を全く違います。信仰書というのは、それに当てはまるでしょう。そして異言については、これはコリント第一 14 章にあるように、神に対して語るものであり、聖書のように他の人々に対して語られるものではありません。

しばしば、私たちは現代文明によって聖書と神の力を軽視してしまいます。今は、医療機関が発達しているから、癒しを求める必要はなくなった。言語教育機関が発達しているから、異言を語る必要はない。また、神学教育がしっかりしているから、悪の勢力に対して知識で対抗し、神の力で対抗しなくてよくなった。いいえ、超自然的な癒し、超自然的な言語的介入、そして知識以上の神の力は昔も、今も必要なのです。それは聖書がそう言っているからです。私たちの信じている主は、昔も今も、いつまでも変わらない方だからです。

そこで、使徒の働き 2 章を見てみましょう。ペテロが、ヨエルの預言によって異言を論証しました。「2:16-21 これは、預言者ヨエルによって語られた事です。『神は言われる。終わりの日に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたがたの息子や娘は預言し、青年は幻を見、老人は夢を見る。その日、わたしのしもべにも、はしためにも、わたしの霊を注ぐ。すると、彼らは預言する。ま

た、わたしは、上は天に不思議なわざを示し、下は地にしるしを示す。それは、血と火と立ち上る煙である。主の大いなる輝かしい日が来る前に、太陽はやみとなり、月は血に変わる。しかし、主の名を呼ぶ者は、みな救われる。』この霊の注ぎは、いつまで続きますか？そう、主の大いなる輝かしい日が来るまでです。大患難の徴もここで現われます。したがって、再臨も大患難も将来のことですから、今も御霊の注ぎが起こっているのです。

そしてペテロがユダヤ人たちに悔い改めよと呼びかけて、勧めた言葉を読んでみましょう。「2:38-39 そこでペテロは彼らに答えた。「悔い改めなさい。そして、それぞれ罪を赦していただくために、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けられるでしょう。なぜなら、この約束は、あなたがたと、その子どもたち、ならびにすべての遠くにいる人々、すなわち、私たちの神である主がお召しになる人々に与えられているからです。」ユダヤ人やその子どもたちだけでなく、その当時の人々だけでなく、遠くにいるすべての人、それから主がお召しになる人々に与えられる、とあります。ということは、私たちもこの約束に含まれているのです。聖霊のバプテスマを受ける約束は、私たちにも与えられています。

2B 知性という妨げ

ですから、私たちは使徒パウロが勧めるように、御霊の賜物を、また預言の賜物や他の賜物を熱心に求めるべきであります。それが知性ではどうしても受け付けられない、異言の賜物も求めていきましょう。

3B 信仰を働かせる

ここで働かせなければいけないのは、信仰であります。私たちは、信仰によって御霊の賜物を受けます。何かトレーニングを受けたり、振り絞ってみたりして賜物を受けることはありません。しかし同時に、信仰というのは具体的な行動に至らせる、躍動的、積極的なものであることを知る必要があります。ただ知性で理解して、何もしていないのではなく、「これさえすれば、主が働いてくださる。」という、信仰を活性化させる何かがあって、それで信仰が働きます。その代表的な例は、長血を患った女です。イエス様の着物のふさに触ることさえできれば、私は治ると彼女は信じた（ルカ 8:43-48）。漠然と、「イエス様には直すことができる。」と信じていたのではなく、行動に出して積極的に信仰を働かせたのです。

思い出すと、私も異言の賜物が与えられた時は、何かの薄い冊子でありました。大学でクリスチャンの先輩が貸してくれたものです。聖霊のバプテスマについて、また異言の賜物についての本でした。そして、どのように受けるのかが、順序立てて説明されています。このようなやり方は、私は今でも抵抗があります。けれども、その時は聖霊からの力を求めていて、この冊子に従えば何か主がしてくださらないかと願いながら読みました。すると、異言が出てきました。不思議な気分でした。体が次第に温まるような経験でした。主との交わりが知性だけでなく、霊によって行われているので、豊かにされていきました。

ですから、信仰の引き金となるようなものを求めるのは、聖書的です。実は、「ここに来れば、私は主から語られる。」という信仰が働いて、それで主から語られます。御霊は、信仰と共に働きます。行動に移すのです。

4B 愛による完成

そして最後に、私たちの大きな目的は、愛です。これは、コリント第一 12-14 章において、異言が取り扱われている真ん中に、愛の章 13 章があることが大事です。異言の賜物が与えられた人が、与えられていない人を見下したり、その反対に持っていない人が、持っている人を見下したり、批判したりすることはいけません。すべては愛によって完成するのであり、この中心から離れてはいけません。聖霊の満たしの究極の徴は、愛です。愛が溢れながれているかどうか、これが聖霊のバプテスマの徴であります。